

学習をはじめる前に

英語を浴びるほど聞くだけでは、不十分！

「英語のリスニング力を伸ばすには生きた英語を浴びるように聴け」とよく言われます。確かに、リスニング力を伸ばすにはたくさんの英語に触れるべきなのは事実ですが、何でもよいから浴びるように聞くという学習は、空回りになります。英語のリスニング力を確実に養成していくには、「**適正インプット**」が必要です。

適正インプットとは？

よく「韓国語と日本語は文法体系が似ているから、日本人には覚えやすい」と言われます。しかし、韓国語の文法や発音、読み方などを何も勉強しないまま韓流ドラマをずっと見続けても、挨拶などのいくつかの単語を拾うことはできても、おそらくそこまで止まりでしょう。

英語の場合も同じです。テレビ番組などで芸能人にナチュラルスピードの英語を聞かせ、どのように聞こえたかを言わせて笑いを取るといった番組がありますが、適正インプットでリスニング・トレーニングをしないと、いつまでもチンプンカンプン状態が続いてしまうかもしれません。

英語の勉強を始めるとき、ふつう私たちは単語レベルの学習から入ります。単語の意味を覚え、発音を学びます。そして、単語の発音にこだわる指導者たちは、細かい発音の違い、たとえば[R]音と[L]の違いや母音の微妙な違いなど、個々の発音を厳しく教え、聞き取れるように教えたりします。

しかし、逆に個々の音素の発音の聞き取りにこだわりすぎると、逆に全体が分からなくなってしまいます。日常生活の中で話される英語

では、単語1語だけということはほとんどありません。フレーズや文になり、しかも前の単語の語尾と次の単語の語頭がつながって別の発音に聞こえたりといった、さまざまな音声変化が起きます。

この**音声変化現象**はネイティブスピーカーたちにとってはごく自然な英語なのですが、私たちにはすぐ速い英語に聞こえ、リスニングをむずかしくしているわけです。

ルールを系統立てて適正にインプットする。

こうした英語の音声変化現象には、ある決まったルール(パターン)があります。そのパターンを覚え、その聞き取り方に沿ってトレーニングを進めていけば、割と簡単にリスニング能力が身についてくるのです。リスニングの伸びがはっきりと体感できます。

本書を学習するのに適している人は？

あとで詳しく述べますが、リスニング能力が伸びやすいのは、文法力やリーディング力がある人です。これはTOEICの調査結果からも判明しています。ですから、本書は「学校の授業や受験勉強などで単語、文法、読解などをしっかり勉強してきたけど、ナチュラルスピードの英語の聞き取りにまだ苦労している」というような人に最適です。

次のページから、本書での学習の展開の様子を述べていきますが、本書では、細かい音素の聴き分けや音声変化現象を学習していくときでも、常にフレーズや文の意味を考えながら進めていくことをいちばんのポイントとしています。

本書での学習展開

それでは、リスニング力を伸ばしていくための、本書での「適正インプット」の学習展開を見ていきましょう。

1. 物理音ではなく意味音を聴く

日本語にない発音や紛らわしい発音の語、例えばR音とL音、B音とV音の違いを聴き取るといったトレーニングがありますが、その音素が含まれる単語だけを聴いて違いを判断しようとするトレーニングは効果がありません。

英文の意味を考えると、多くの人は「この単語がこんな意味だから、文の意味はこうなる」と考えるかと思います。単語の下に訳語を書きいき、あとでそれを全部足して文の意味を作り出していった経験のある人も多いのではないのでしょうか。

しかし実は逆で、「英文の全体の意味がこうだから、ここで使われている単語の意味はこうなる」が正しい考え方です。

英語の音声でも同じです。細かい音素が聴き取れるようになれば単語の音声が分かり、単語の音声が分かれば、そのつながりである文の音声、文章の音声が分かるようになると思う人も多いかと思いますが、これも逆です。意味が分かると、細かい音素が聴き取れるようになるのです。

この章では、フレーズを使ったり文を使ったりして、意味をつかみながら音素や全体の音声を聴き取る習慣を付けていく学習をしましょう。

2. 音声変化に慣れる

ナチュラルスピードの英文では、単語1語1語での発音とは違い、消失、弱化、短縮、連結、脱落、同化など、いろいろな音声変化が起きます。

多くの英語学習者は、こうした音声変化の聴き取りに苦労しています。リスニングを困難にするこうした音声変化の現象はどのようなときに起き、そして、どのような聴き方をすればしっかり内容が理解でき、音素の聴き取りにつながっていくのかなどを学習・トレーニングします。

3. イメージトレーニングでリスニング力を伸ばす

本書では、イメージトレーニングでリスニング力を伸ばす学習も進めます。英文の単語や文を拾おうとする習慣から脱却し、音声をそのまま意味として理解できるようにするため、視覚を使ったり情景を思い浮かべたりする学習です。

これは楽しく学習が進むこと請け合いです。

4. 推測・軌道修正能力で伸ばすリスニング力

リーディングもリスニングも、「推測・予測と軌道修正の繰り返し」が、内容理解のメカニズムです。

この章では、ヒントやディスコースマーカーなどを使い、予測と軌道修正の能力を高めていくトレーニングを展開していきます。

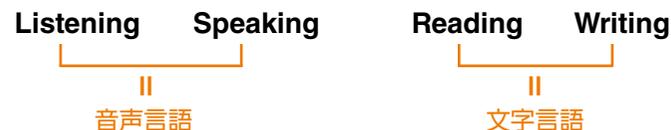
英語の4技能とリスニングの関係

本書でのリスニング養成トレーニングに入る前に、英語の4技能(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)の中でのリスニングの役割などを考えてみましょう。

そして、リスニングとリーディングを「理解言語」、スピーキングとライティングを「表現言語(使用言語)」に分けることもできます。



そして、また音声言語と文字言語に分けると、次のようになります。



「理解言語」は読んだり聞いたりして理解する言葉で、「受容言語」ともいいます。「表現言語」は話したり書いたりする言葉です。

理解言語と表現言語

「英語の4技能」を「理解言語」と「表現言語」という2つのグループに分けるという考え方は、あまり浸透していないようです。しかし、言語には次の大原則があります。

言語理解が常に言語表現に先んじ、そして大きく上回る。

表現言語は理解言語に包含されるということです。つまり、リスニングとスピーキングで考えると、理解言語であるリスニング能力のほうが表現言語であるスピーキング力を大きく上回ります。

「聴き取れるのに、それと同じようには話せないのがもどかしい」という感覚は、だれもが経験します。文字言語でも同じです。読めて理解できても、それと同じレベルの文は、ふつう誰も書くことはできません。逆に、自分が書けるレベルの英文は理解できます。自分で理解できない表現言語はないということです。

図で表すと、右のページの図のようになります。実際の割合は、理解言語のほうが、もっとずっと大きいのですが。

理解言語と表現言語のバランス

では、理解言語は表現言語をどのくらい上回るのでしょうか。逆に言うと、どのくらいの理解言語を身に付けると、表現言語がどの程度身に付いてくるのでしょうか。

音声言語や文字言語では具体的なバランスを示す数値を求めるのはなかなか困難ですから、語彙数で見ましょう。

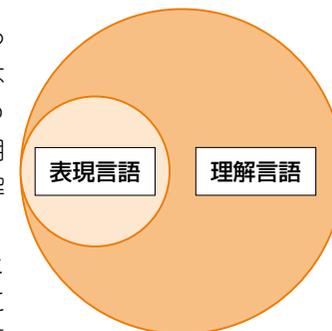
単語を大きく分けると次のようになりますが、その中から、理解語と使用語のバランスの数値を見ましょう。

未知語 — 文字どおり未知の単語。見たことがあっても意味は知らない単語や、その存在すら知らない単語など。

曖昧語 — 日本語の語義などでうる覚えの単語。多くの人はこちらを「理解語」と思うが、瞬時にその意味や用法が理解できないと理解語とは言えない。

理解語 — 聞いたり読んだりしたときに、その意味が瞬時に理解できる単語。日本語の語義がすぐには思い浮かばないくらいだが、意味はよく知っている単語。

使用語 — 文字どおり、話したり書いたりに使える単語。用法がはっきりしなくても辞書などに当たればすぐに使える単語。



英米人の語彙力 (非常に知識のある人の場合)

語彙力の場合、参考になるデータがあります。下の表は、知識・教養のある英米人の、言わば特殊な職業の人たちの語彙力を示したものです。彼らが読んで理解する語彙と、その理解単語の中で書いて使用できる語彙数を表しています。一般的な大卒レベルの人たちよりずっと語彙力があります。

	理解語彙数	使用語彙数
秘書	38,300	31,500
読書家	73,350	63,000
大学教師	76,250	56,250

〔ケンブリッジ英語百科事典 (the Cambridge Encyclopedia of the English Language, 1995, 123)〕

この表で見る限り、理解語彙のほとんどが使用語彙としても使われていることとなりますが、これは特殊な職業や地位にある人たちだからと言えます。つまり、職務上書くことが日常的で、しかも、難度の高い語彙を使って書く立場にある人たちだからと言えるでしょう。

一般大卒の英米人の使用語彙数

それでは、一般的な英語ネイティブ・スピーカーの使用語数はどのくらいでしょうか。

これにはギネスブックが調査した資料があります。これによると、16年間の学校教育を受けたふつうのイギリス人のスピーキングとライティングに使う「基本運用語彙数」は、次のとおりです。

スピーキング使用語彙数	約 5,000	
ライティング使用語彙数	約 10,000	(ギネスブックより)

「基本運用語彙」というのは、多くの人に共通して使われる語彙のことです。つまり、**最大公約数的な語彙**です。したがって、各個人の運用語彙数は、当然、これよりもずっと多くなります。

この表での数字は、大学卒業までの教育を受けた人たちが共通して使うであろう語彙の数を示しています。前ページのトップに掲げた表から、教養ある人たちの理解語彙数は、約**3～7万語**だろうと考えられます。そして、共通してスピーキングに使われる「基本運用語彙」が約5,000語で、ライティングの際には約10,000語が使われると考えられるというわけです。

つまり、音声言語では、理解語彙の約10分の1が使用語彙として使われ、文字言語では約5分の1です。これは、スピーキングのときは瞬時に知っている単語を使わなければならないのに対して、ライティングでは使う単語を考え出すための時間に余裕があるからです。

リスニング力の効果的な伸ばし方

今まで、英語の4技能のバランスや役割を見てきました。理解言語が表現言語を大きく上回るのですから、話したり書いたりという表現言語を伸ばすには、理解言語を先に大きく伸ばしておく必要があるというわけです。

ところが、同じ理解言語であるリーディング力とリスニング力には次のような関係があります。

リスニング力を伸ばすにはリーディング力が必要

このタイトルを見て「？」と思われた人も多いことでしょう。ですが、英語の4技能のうち、最初に伸ばしていくべきなのはリーディングなのです。「**リーディング力がすべての技能に先んずる**」ことがよく分かるデータをご覧ください。

CEPAC(セパック)

以前、TOEICスコアと英語研修結果、研修時間などのデータを元に作成された**セパック**(Communicative English Proficiency Assessment and Counselling System)と呼ばれるコンピュータープログラムがありました。このプログラムでは、TOEICスコアを元に、現時点での評価カウンセリング、英語研修成果予測などを分析することがありました。

英語研修成果予測では、現時点でのTOEICスコアから、ある目標のスコアまでに要する研修時間(学習時間)を予測したり、逆に、研修時間から最終スコアを予測したりということができました。

下の図をご覧ください。

TOEIC			研修時間 (**)	目標レベル達成に 必要な学習時間
LISTENING	READING	TOTAL		
400	200	600	----	
320	270	590	50	
200	330	580	50	
305	250	555	150	
290	240	530	250	
310	220	530	250	
205	320	525	100	
245	270	515	200	
250	260	510	250	
265	235	500	300	
275	215	490	400	同じスコアでも リスニング・リー ディングのバラ ンスにより必要学習 時間が変わります
165	285	450	350	
255	195	450	500	
225	175	435	700	
195	210	405	600	
290	185	405	450	
225	175	400	700	
100	285	385	550	
100	285	385	550	
175	195	370	750	

リーディング力があると、リスニング力が伸びやすい

前のページの図で四角で囲った2人のスコアは、いずれもトータルスコア 450 点です。しかし、600 点を取るまでにかかる研修時間(学習時間)は、上の人 が 350 時間なのに対して、下の方は 500 時間となっています。150 時間も差があるのです。なぜでしょうか。

それは、上の方のリーディングスコアが高いからです。トータルスコアは同じでも、下の方のリーディングスコアが 195 点なのに対して、上の方は 100 点近く高い 285 点です。この差が 150 時間という研修時間の差になったのです。

英文をたやすく読めるということは、文法力、語彙力、構文力、展開予測力など、いわゆる「読解力」が備わっているということです。リーディング力があるのにリスニング力が足りない(スコアが低い)ということは、単に「英語の音声に慣れていない」だけなのです。

次のようになります。

リーディング力があれば、リスニングが急速に伸びる。

